

特集・夏休み活動報告

ロンドンの広場でパラリンピック取材

車椅子の英国選手らに学んだ

五十川 裕明 文学部人文・ジャーナリズム学科2年次

「How do you think para-lympic games?」 たお金をすべて使ってロンドンに来た。

開催中(8月29日〜9月9日)、ロンドンのトラファルガー広場で、電子辞書とメモ帳を片手に、広場にいる人々に話しかけた。その数100人以上。大会の様子をウェブで報道するパラリンピック取材だ。

これは、今年の2月、「日本ジャーナリスト会議」の講演会で、障害者スポーツ取材するNPOの方と知り合ったことから。東京で行われる障害者スポーツを見に行くようになった。

NPOの代表に「ロンドンに行かないか?」と聞かれた。かかる費用はすべて君の自己負担になるが」と誘われ、私は迷わずに「はい!」と答えない。

片言英語…不審顔の人もいて苦労

「と言われた。

でも私の英語は片言。あき。

トラファルガー広場で取材する五十川さんらから聞いておいた質問カードから2、3の項目を聞き、ボイスレコーダーに録音。それを後で書き起こした。

試合中継を見ている人たちがいっぱい。最初は話しかけても無視されっぱなしだった。

トラファルガー広場で取材する五十川さんらから聞いておいた質問カードから2、3の項目を聞き、ボイスレコーダーに録音。それを後で書き起こした。



▲ 閉会式の中継を楽しむ人々

地下鉄で30分ほどのトラファルガー広場は、大型モニターで試合中継がされている。そこで観戦する人たちが取材することになった。1日に96万人がその駅を利用していることが分かった。一つの質問に10分近くかかることもあった。

「パラリンピックのことを聞きたいんです」と話し、嫌がる職員に執務室から資料を取ってきてもらった。ハンディを持つ人に対する考え方も変わった。トラファルガー広場で、車椅子に乗ったイギリス人柔道選手が広場に敷いてあった配線の段差に引っ掛かってしまった。前に進めないでいるその男子選手に、近くで見ている3人組の20代くらいの女性たちが手を差し伸べる。

「言われた。でも私の英語は片言。あき。閉会式。大型モニターの様子はなく、手を差し伸べてくれた女性に「ここに来なよ!」と笑顔で柔道の選手に誘った。つまずき、ハッとした。私はハンディを持った人を、心のどこかでかわいそうだと目で見えていなかったか……。ハンディがあっても自分にかきつけば広場の人たちは総立ちになって踊っていた。私も隣にいた女の子と一緒に踊ろうよ」と声をかけられ、ロンドンの人たちで作られた大きな人の輪をしかりと持つて生きている人たち。私よりもはるかに生き生きと過ごしているではないか。ハンディがあっても負けないハートの大切さを教えてもらった。

学生の感性発揮して 課題解決型インターンシップ

キャリアデザインセンター

川崎市内を中心とした企業や団体、商店街が抱える課題に学生が解決策を提案するキャリアデザインセンターの「課題解決型インターンシップ」。夏に行われた3つの活動を紹介します。

「生田緑地サマーミュージアム」で地域交流の「場」づくりを企画

ライプスティングや出店など環境に配慮したリユース食器の認知・回収を課題に活動した出店部の白鳥貴之さん(経済3)は「回収率100%を目標に、リユース食器利店街有志やNPO団体などで構成される実行委員会に専任9人が参加。地域交流の場を盛り上げようと汗を流した。」と話す。



▲ クイズラリーも人気

「多摩川夕涼みコンサート」でエコをテーマにイベントを企画

8月19日、多摩川の二ヶ領せせらぎ館下の河川敷でNPO法人多摩川エコミュージアムと同区が主催する「第8回多摩川夕涼みコンサート」が行われ、専大生50人が企画・運営に参加した。

ステージ横に設けられた企画ブースに本学などの学生が出演。多摩川環境とエコをテーマに工作体験やゲームを企画。専大生23人が商店街や地域の方々と協力して企画運営に携わった。「またまた子育て」も同時開催され、親子連れでにぎわった。



▲ 竹の水鉄砲で遊ぶ子どもたち

用店マップを作り、店頭に目印となるパネルを掲げた。また、NPO団体の協力で地域通貨と交換する新たな試みもできた」と話す。

フェイスブックやブログで生田緑地の情報や活動の様子を伝え、花倉育美さん(文3)は「近隣にこんなに緑豊かな場所がある。それをうまく伝えられるか悩んだ。訪れる人の視点で何が必要なのかを考えた」と確かな成果を得た様子。

リーダーの羽岡信さん(文2)は「学部の時間も違う。同じく本山正人さん(経済3)は「大学生の自分が責任ある立場で大人と対等に話せる貴重な体験だった」と大きな進歩。反省点を次に活かせる貴重な体験だった」と意欲を見せた。

学生たちは6グループに分かれて活動。ペットボトルと割りばしで作るペットボトルシップや牛乳パックの灯ろう、古着を利用したエコバッグ

藤子・F・不二雄ミュージアム開館1周年記念イベント「わくわくま」を企画運営

9月16日、多摩市民館で「藤子・F・不二雄ミュージアム」開館1周年を記念するイベント「わくわくま」が開催された。専大生23人が商店街や地域の方々と協力して企画運営に携わった。「またまた子育て」も同時開催され、親子連れでにぎわった。

20歳の記念に新しいことに挑戦したというギャラリー部の大場千明さん(人間科学2)は「学年も学部も違う学生たちと交流をはかるのに苦労したが、話す力と聞く力がついた」と話した。

メディア関係の仕事に就きたいという広報部の前田夏美さん(経営2)は、「人と人とのつながりの大切さがあった。広報の仕事にますます興味があった」と話した。